

## ぶるす

四季の会・ユーザーズ・サービス

340号

発行人 夫

拝啓 薫風の候、先生におかれましては益々御健勝のことと存じます。

よく新聞で認知症のことが出ている。今認知症患者は約300万人、25年には470万人になると政府は思っています。4/28・日経によれば、年をとってから認知症にならない職業が2種類あるそうです。

毎月1000人近い認知症を診察する専門医の長谷川嘉哉さんが、自身の経験などから「作家や音楽家、画家などの芸術家」と、「やり手の経営者」（とくに創業者）だということです。ど真剣な態度の「税理士の皆様は認知症にはならない」と思います。その人たちは、感情を遠慮なく表現し、逆境も楽しむ、比較的認知症と縁遠い。緊張感と、ど真剣・熱意で、頭を使うと認知症の防止になるというのです。

認知症患者の事例で、こんなことがあります。2007年、徘徊中の認知症男性(当時91歳)が電車にはねられ死亡した。同居する妻が数分間、うたた寝をした間に1人で家を出たのだ。鉄道会社は損害賠償を求め、先日の控訴審判決は妻(同85歳)に約360万円の支払いを命じた。老いや病で自立困難なとき、夫婦は介護や監督の義務がある。それを怠ったという理由だ。大変きびしい時代にあるのです。

こんな記事もある。5/14読売によると、京都市内で財布をひったくられた77歳の女性が39歳の男を「泥棒!」と叫びながら約150メートル追走し、通行人の協力を得て取り押さえたという。「おばあさんに追いつかれるなんて・・・」。男は警察署員にぼやいたと記事にある。その「おばあさん」という呼び名さえ似合わぬ、心身ともに澆刺とした高齢者の増えた現代である。いまは「15歳以上～65歳未満」の生産年齢人口(=働く人口)を70歳まで引き上げよう。出産や子育ての支援とともに高齢者の活力が、日本の未来を描く青写真の大事なことですね。新聞記事を見ると少子高齢化の時代、興味深いこともあります。

## 焦点を定めて生きる 決算診断こそ会計事務所を良くする

子供の頃、虫メガネに太陽の光を集めて紙を燃やした経験は多くの人を持っているに違いない。太陽の光を一点に集中させてじっと固定していると焦げ目の点ができ、かすかな煙を上げて広がり、紙がにわかにならぬ。焦点をふらふらさせてはこうはならない。単純な遊びだが、この現象はそのまま、人生のあり方を示唆しているように思える。焦点を定めて生きないと人生は拡散し、何の結晶も得ぬままに終わってしまう、ということもあるのです。

剣豪塚原ト伝にこんな逸話がある。武者修行で全国を旅していた頃である。大きな石が道を塞いでいた。数人がかりでのけよとしたが、びくともするものではない。そこに石工がやってきて、石の一点に槌を打ち込んだ。大きな石はたちどころに割れた。どうしてそういうことができるのか、とト伝は聞いた。

「石には目があります。そこに槌を当てるとたやすく割れます。目でないところをいくら打っても割れるものではありません」それが石工の答えだった。ト伝は大いに感じ入り、剣の極意を会得したという。焦点を定めることの大事さを教えてくれる話です。

二宮尊徳はまさに焦点を定めて人生を生きた人である。尊徳は天明七(1787)年に生まれ、七十歳で生を終えた。それは幕末の国家的動乱期で、内憂外患の時代であった。その時期に尊徳は貧困にあえぐ農民救済に焦点を定め、国事を一切論じず、一滴の血も流さず、一発の銃弾も撃たず、荒廃した全国六百余村を復興し、疲弊した藩の財政を再建した。その根本は四つの教えに尽きる。「至誠を本とし、勤労を主とし、分度を体とし、推譲を用とす」

まごころを根本に置き、懸命に働き、自分の分限に応じて暮らし、今年得たものは来年のために譲る。子孫に譲り、社会に譲る—この報徳思想の普及と実践が、偉大な成果を生んだのです。

これが「決算診断」の考え方、信条です。決算診断実践会の皆様が常々実践されております「経営支援」です。決算をしない会計事務所はないのです。数字に強い社長に！我々の使命です。社長にとって「本当に必要な情報」を手に入れ、必要な事実をつかむことが大事です。仕事こそうまくいく社長は、「いま必要な事実を見極める」ことができる「決算診断提案書」です。

決算を終わった！税務申告も済んだ！これだけでは社長は「もの足りない」のです。身近な決算が「決算診断提案書」に変わります。数字が数値に変わると、全く決算の世界が変わるのです。「分析」とは、数字を比べることです。時系列で比べられる。全体が部分をとらえることができます。6要素診断は、決算診断の最大の特徴です。ここにこそ、経営分析することが

価値を持つことができるのです。

5月は3月期決算が一番多い月です。この5月こそ、決算診断を活かして下さい。マネージメント・パワー、これも年一回の社長の定性分析です。アンケートで簡単明瞭でしかも、価値観を高め自己人格確立のひとつです。一般的な「税理士・会計事務所は」決算は、税務申告だけだと思っているので、そのお客様は「もの足りない」です。大いにPRして新規にしてみても！社長は「ビジネスで数字の戦いをしているのです。」私たちは社長を支援していきましょう。決算診断は会社を良くし、会計事務所を良くします。

## 社長力とは「目覚める力」

松下幸之助翁は「一人の目覚めは100人に及び、100人の目覚めは1000人に及び、1000人の目覚めは会社全体に及んで、社会に及び」と述べられています。まさに、社長が目覚めれば、幹部が目覚め、幹部が目覚めれば社員さんが目覚めていくのです。

「目覚め」とは、道を求める志や使命に気づくことです。「君が学んだのは学問です。それは立派なことです。しかし、問学だけでは真の勉強にはなりません。『道を求める心』がなければ、単なる物知りになるだけです。」と答えられました。

つまり、学問には問学と求道の二つがあるのです。問学とは知識や方法論を学ぶことです。生きていく上でも経営をしていく上でも、時代は絶えず変化していくのですから、問学は非常に重要です。

しかし、いくら知識や方法論が豊富でも、それを最大限生かして、どのように社会に役立つ生き方や経営ができるか、という道を求める気持ちがなければ「単なる物知り」に終わります。

松下幸之助翁は、大阪電灯時代に仕事をしながら夜学に通いましたが、時間が取れなくて授業についていけず、中退を余儀なくされます。しかし、道を求める気持ちを忘れず、その後も熱心に学んで「二股ソケット」を独力で考案するなど、問学と求道の両面をバランスよく持ち合わせて成功されたのです。

社長力とは「目覚める力」のことです。どんなに時間がかかっても、天命に目覚め、使命に目覚めなければいけません。そして、社長として、そういう生き方をしていくべきか、どういう経営をするべきかを、日々自分に問わなければなりません。

どの社長にも自分なりの使命があります。日本という国に生まれ、かつ厳しい時代の渦中に生きています。自分の会社が良ければそれでよし、とするのではなく、高い志を持って道を求める姿勢こそ真の社長の姿でしょう。(理念と経営 5月号より)

一人の人間として、世のため人のために役立つ生き方が、幹部はじめ多くの人に及び、会社全体、さらに社会にまで影響を及ぼすようになります。社長の責任はそれだけ重く偉大なのです。